

第 1750 回（5 月 12 日）

世界の穀物市場とアジアの食料安全保障

中 川 光 弘

世界の食料需給の将来見通しに関しては、楽観論と悲観論に分かれている。楽観論者達は、農産物市場の持つ需給調整機能と農業技術進歩の進展への信頼から、今後とも十分な食料供給が可能であると主張しているのに対して、悲観論者達は、土地や水資源の制約、地球環境問題の食料生産への影響、農業技術進歩の停滞等についての懸念から、世界の食料需給の逼迫化は避けられないと主張している。このように将来見通しに関しては、その見解が大きく異なっているが、これまでの世界の食料事情の推移を振り返って見ると、明らかな改善の傾向が認められる。この食料事情の改善は特にアジアで著しく、アジアの栄養不足人口の割合は、70 年代初頭の 38 % から 90 年代半ばの 19 % へ低下した。ただし、それでも現在の世界の栄養不足人口 8 億 4 千万人の 62 % はアジアに居住している。

アジアでは、東・東南アジアを中心に 80 年代半ばから経済成長が本格化し、この経済成長に伴って農業・農村部門でも急速な構造変化が起こっている。特に日本やアジア N I E S の韓国、台湾、マレーシアでは、国内畜産部門の拡大に伴う穀物需要の増加に国内生産が追い付かず、穀物自給率の急速な低下が起こり、現在では 3 割を下回るに至っている。

このように経済発展に伴ってアジアでは穀物自給率が急速に低下し、世界穀物市場への依存を高めているが、世界の穀物需給は 90 年代に入って逼迫化傾向を強めている。世界の穀物期末在庫は、過剰傾向が強かった 80 年代半ばには 4 億 7 千万トンに累増していたが、その後のアジアを中心とした輸入需要の増加、先進穀物輸出国での生産調整の強化と支持価格の引き下げ等によって過剰の調整が進み、96 年の期末在庫は 2 億 7 千万トンに

まで縮小した。さらに、これまで世界の穀物需給の安定化に大きく貢献してきたアメリカの政府在庫の縮小が著しく、アメリカの政府在庫が果たしてきた世界穀物市場での緩衝在庫としての機能が急速に低下している。

世界穀物市場が逼迫化傾向を強めているもう一つの主因に、「緑の革命」の効果に翳りが見え始めてきたことがある。特にアジアでは、多くの諸国で米の単収の伸び悩み傾向が見られるようになってきた。例えば韓国、フィリピン、インドネシアでは「緑の革命」の進展により 70 年代、80 年代を通じて 2 % ～ 3 % 台で米の単収が上昇を続け、80 年代には米の自給が達成されたが、90 年代に入ると単収が伸び悩むようになり、再び輸入への依存を高めている。世界穀物需給モデルを使った予測でも、最近の単収上昇率を組み込んで 2010 年までの米の国際需給を予測すると、需給がかなり逼迫化することが見込まれる。さらに長期的には、地球温暖化に代表されるような地球環境問題の食料生産への影響があり、世界穀物市場が不安定性を増すことが予想される。

このような情勢の中で、アジアの食料安全保障を高めるためには、新しい世界穀物緩衝在庫の創設や穀物貿易協定の見直しが必要であり、「緑の革命」の効果の鈍化に対しては、80 年代後半以降停滞している農業研究開発と農業技術普及への投資を増加させることが必要である。穀物生産をめぐる資源環境制約は今後も強まることが予想されるので、輸出国、輸入国ともに国内の地域資源保全と適切な資源利用調整に努め、国際貿易も含めた安定的な食料供給システムを確立していくことが重要である。